

日本心理学会第 77 回大会公募シンポジウム「現代社会における『宗教の役割』を考える」

「キリスト教の立場から」

西脇良 (南山大学)

1. 日本のカトリック教育の歩み

1. 1. 幕末期から明治期

- ・日米和親条約以前に、パリ外国宣教会の初代日本代牧司教であったフォルカード神父が長崎港へ寄港。上陸は出来ず。
- ・安政の五カ国条約締結を機に、同宣教会のカシオン神父が通訳として来日。

表 1. 幕末期における宣教師の来日

西暦	和暦	事項
1549	天文 18	イエズス会宣教師フランシコ・ザビエル来日
1587	天正 15	秀吉によるバテレン追放令
1596	慶長元	秀吉による禁教令
1613	慶長 18	幕府による禁教令
1846	弘化 03	T.A.フォルカード(パリ外国宣教会・初代日本代牧司教)、長崎港へ
1853	嘉永 06	アメリカ艦隊、浦賀沖に出現
1854	嘉永 07	日米和親条約締結(下田港・函館港の開港) 日英和親条約締結(函館港・[長崎港]の開港)
1855	安政 02	日蘭和親条約締結(長崎市街への出入り許可) 日露和親条約(長崎港・横浜港の開港)
1858	安政 05	安政の五カ国条約 アメリカ(日米修好通商条約)、オランダ(日蘭修好通商条約)、 ロシア(日露修好通商条約)、イギリス(日英修好通商条約)、 フランス(日仏修好通商条約) 日仏修好通商条約交渉におけるフランス全権公使グロ男爵の通訳として、琉球で待機していた M.カシオン(パリ外国宣教会)が随行。
1859	安政 06	米国宣教師 6 名の来日 J.リギンズ、C.M.ウィリアムズ(米国監督教会) J.C.ヘボン(米国長老教会) S.R.ブラウン、D.B.シモンズ、G.H.F.フルベッキ(米国オランダ改革派教会) ロシア正教会司祭が来日 W.マーホフ(ロシア正教)→N.カサートキン(1861 年来日) パリ外国宣教会が来日 P.S.B.ジラル(フランス総領事ド・ベルクール通訳・日本代牧司教・パリ外国宣教会)

- ・明治期におけるカトリック学校設立は、その特徴により 3 期に分けられる。

第 1 期 3 女子修道会による活動

- ・幼きイエス会 (サンモール修道会・雙葉学園)、シャルトル聖パウロ修道女会 (白百合学園)、

シュファイユの幼きイエズス修道会(信愛女学院)による学校設置。

- ・貧民救済事業や社会福祉事業を背景として、その延長としての学校教育。
- ・外国人子女教育や欧化主義を背景として、富裕層への西洋式女子教育。

第2期 男子教育の開始

- ・マリア会(暁星学園・海星学園・明星学園)による学校設置。
- ・中等教育を主目的として設立。

第3期 フランス系修道会以外の修道会による活動

- ・スペインの聖ドミニコ宣教修道女会(聖カタリナ学園)、
- ドイツの聖霊奉侍布教修道女会(聖霊学園)、
- ドイツの殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会(藤学園)による学校設置。

- ・1899年(明治32)、「私立学校令」公布および「訓令第12号」。公認の学校において宗教上の儀式・教育を行うことの禁止。欧化主義から国家主義への政策転換が行われ、キリスト教学校存立の危機を迎える。廃校、普通校への転換、専門学校への転換など。

表2. 明治期におけるカトリック学校の設立

西暦	和暦	学校設立	設立地
		【プロテスタント系キリスト教主義学校の設立】	
1862	文久02	G.H.F.フルベッキ(1830-1898)、フルベッキ塾	長崎
1863	文久03	J.C.ヘボン(1815-1911)夫妻、ヘボン塾(→明治学院)	横浜
1870	明治03	M.E.キダー(1834-1910)、ヘボン塾で女子教育(→フェリス女学院)	東京
		J.カロゾルス(1845-1914)、A六番女学校(→女子学院)	東京
1871	明治04	プライン、クロスビー、ピアソン(米国婦人一致外国伝道協会宣教師)、 アメリカン・ミッション・ホーム(亜米利加婦人教授所)(→横浜共立学園)	横浜
1872		H.スタウト(米国オランダ改革派)夫妻、私塾(→梅光学院)	長崎
		【カトリック学校の設立】	
1875	明治08	幼きイエス会(サンモール修道会)、築地に語学学校設立(→雙葉学園)	東京
1881	明治14	シャルトル聖パウロ修道女会、小学校設立(→白百合学園)。	東京
1884	明治17	シュファイユの幼きイエズス修道会、信愛女学校設立(→大阪信愛女学院)	大阪
1886	明治19	シュファイユの幼きイエズス修道会、私立岡山女学校設立 (→1924年ナミュール・ノートルダム修道女会へ移譲・ノートルダム清心学園)	岡山
		シャルトル聖パウロ修道女会、私立聖保禄女学校設立	函館
1888	明治21	マリア会、暁星学校設立(→暁星学園)	東京
1890	明治23	シュファイユの幼きイエズス修道会、信愛小学校設立	大阪
1892	明治25	シャルトル聖パウロ修道女会、私立盛岡女学校設立 マリア会、海星学校設立(→海星学園)	岩手 長崎
1893	明治26	シャルトル聖パウロ修道女会、私立仙台女学校設立	宮城
1898	明治31	マリア会、明星学校設立(→大阪明星学園)	大阪
		シャルトル聖パウロ修道女会、高等女子仏英和学校設立	東京
1900	明治33	シュファイユの幼きイエズス修道会、熊本玫瑰女学校設立(→熊本信愛女学院) 幼きイエス会(サンモール修道会)、紅蘭女学校設立(→横浜雙葉学園)	熊本 神奈川

1903	明治 36	幼きイエス会(サンモール修道会)、私立仏英女学校設立(→静岡雙葉学園)	静岡
1907	明治 40	パリ外国宣教会、宮津裁縫伝習所設立(→聖ヨゼフ学園[京都暁星中高など])	京都府
1908	明治 41	聖心会、語学学校設立(→聖心女子学院)	東京
		シュフアイユの幼きイエズス修道会、大阪信愛高等女学校設立	大阪
		聖霊修道会、檜山幼稚園設(→秋田聖霊学園)	秋田
1909	明治 42	シャルトル聖パウロ修道女会、八代女子技芸学校設立	熊本
		聖霊修道会、女子職業学校設立(→名古屋聖霊学園→1995 年南山学園と合併)	名古屋
1910	明治 43	聖心会、私立聖心女子学院設立	東京
		安川敬一郎・松本健次郎により明治尋常小学校校設立	福岡
		(→1949 年コングレガシオン・ド・ノートルダム(C.N.D)修道会へ移譲・明治学園)	
		幼きイエス会(サンモール修道会)、雙葉高等女学校設立	東京
1911	明治 44	幼きイエス会(サンモール修道会)、雙葉女子尋常小学校設立	東京
		イエズス会、財団法人上智学院設立(→上智学院)	東京

参考：井上順孝監修・國學院大學日本文化研究所編。(1993). 宗教教育資料集. すずき出版 ほか

1. 2. 大正時代

- ・フランス以外の修道会による学校設立。カトリック学校の国際化。
- ・パリ外国宣教会の第 1 世代の宣教師らが逝去。ド・ロ神父(1914 年 [大正 3])、ベルトラン神父(1917 年 [大正 6])、リギョール神父(1922 年 [大正 11])ら。
- ・高等教育への進出。上智大学(1913 年 [大正 2])、聖心女子学院高等専門学校(1916 年 [大正 5])、東京帝大のカトリック研究会(1920 年 [大正 9])など。
- ・比較的安定した時代。平和主義・国際協調の盛り上がりがかトリック学校入学志願者数の増加へ。
- ・しかし 1925 年(大正 14 年)「陸軍現役将校配属令」(勅令第 135 号)が公布されると、私立学校であるカトリック学校にも一部、将校が配属。

1. 3. 昭和初期

- ・国家神道、皇民化教育による弾圧の時代。満州事変(1931 年 [昭和 6])を契機として、思想・言論統制が強化。
- ・神宮式年遷宮を迎えた 1929 年(昭和 4)、伊勢神宮遥拝式をめぐり、長崎海星中学校事件。
- ・1932 年(昭和 7)、上智大学事件。靖国神社での不参拝。上智大学・暁星中学からの配属将校引き揚げ。上智大学・暁星中学・海星中学校への通達。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 一 宗教と教育および教授の分離 二 校舎内に聖堂を設けざること 三 生徒を聖堂に出入させないこと 四 公教要理を教えないこと 五 教室で宗教について話さないこと 六 寄宿生を学校の聖堂に出入りさせてはならない、彼らは市の教会へ行くべきであること 七 校内でクリスマス・ツリーその他の行事を行ってはならないこと 八 学校の教職員の懇談会をしばしば開くこと 九 配属将校は他の職員同様、学校の内外において生徒の監督権を有すること 十 国家主義教育の強化、ご真影奉安庫の設置 |
|---|

- ・1935年(昭和5)頃より、カトリック学校でも神社への戦勝祈願、出征兵士見送り、傷病兵慰問などの記録が増加。学校行事(講話や映画)の内容や試験問題にさえ軍事色。
- ・1939年(昭和14)、「宗教団体法」施行。宗教団体を国家統制下に置く。カトリック教会は「日本天主教教団」へ。教区長(司教)はすべて日本人に交代。カトリック学校も、学長・校長・幼稚園長などはすべて日本人に交代。
- ・1944年(昭和18)、「決戦非常措置要綱に基づく学徒動員実施要項」により中等学校生徒以上が軍需工場等へ動員。また、学童集団疎開実施。カトリック小学校12校も。

1. 4. 昭和中期(1945~1965)

- ・1945年(昭和20)11月、文部省は私立学校に対し、課程外の宗教教育実施を許可。キリスト教教育を容認。
- ・1947年(昭和22)5月、日本国憲法施行。
- ・欧米各国の修道会が来日し、外国信徒の献金による資金的援助を受けつつ、医療福祉施設や学校を次々と設立。

表4. カトリック学校の設立件数

カトリック教育機関設立件数

年代	小学校	中学校	高等学校	短期大学	大学
1858~1912	5	13	14		
1912~1926	3	3	3		1
1926~1945	4	5	11		
小計	12	21	28		1
1946	2	1	2	1	
1947	5	10			
1948		5	8		1
1949	2	5	5		2
1950	1	2	2	4	2
1951	4	4	7		
1952	1	5	7		
1953	4	1	5		
1954	6	3	3	1	
1955	2	1	3	3	
1956	4	6	4		
1957		2	1	1	
1958	1	3	3		
1959	1	2	6	1	
1960	1	3	4	2	
1961	1	5	7	1	2
1962		2	5	1	
小計	35	60	72	15	7
合計	47	81	100	15	8

- ・カトリック学校は、学習生活指導、全人教育、良好な友人関係、国際的イメージ、中高一貫校、などの教育内容で多くの親の期待に応えようとした。

1. 5. 昭和後期 (1966~1989)

- ・1962~1965年(昭和37~39)、第2ヴァチカン公会議。カトリック教会の現代化。社会に対する閉鎖的な姿勢から開かれた姿勢への刷新。ラテン語典礼から日本語典礼へ。フォークミサ。修道服の簡素化・私服化。社会正義への関心と関与。
- ・公会議は、カトリック学校にも影響。聖書解釈の変化。ミサ・聖母祭・聖体行列などの宗教行事の簡素化や廃止。「宗教臭くないカトリック学校」が目指された。
- ・司祭・修道者の高齢化。新規入会者の減少。カトリック学校に勤務する司祭・修道者の激減。「カトリック学校」のアイデンティティ存続の危機。司祭・修道女に任せていた宗教教育からの展開の必要性。
- ・受験競争、少子化、財政難、などの問題。宗教教育を論じる以前に「学校経営危機」「学校存続危機」に直面している状態。

2. 現状と課題—或るカトリック小学校における教育実践例—

2. 1. 設立時の想い

- ・新設のカトリック小学校「南山大学附属小学校」(名古屋市・2008年開校)の設立に、大学教員・設立母体修道会司祭として関わる。現在も週4日勤務。
- ・学校を創るという経験。開校にあたり、宗教教育のデザインを白紙から検討する機会。聖堂設計からカリキュラムまで。子どもを中心に、その子どもを取り巻く「環境」はどうあるべきか、という観点からデザインした。
- ・キーワードは「施設設備(聖堂・ステンドグラス等)」「ひと(教員・保護者)」「カリキュラム(行事・祈り・授業)」。校舎建設時、とくに心を砕いたのは「施設設備」。宗教的な施設設備は、それだけでノンバーバル・コミュニケーション。「シンボル」のもつ力と、それに応える子どもの力。

2. 2. 宗教教育の目的

【教育のモットー】

「かけがえのないあなたと私のために」(南山学園の共通理念「人間の尊厳のために」)

【校訓】

- 神さまから愛されていることを知る人になろう
- みんなで努力して生きる人になろう
- 最後まであきらめず努力する人になろう
- 周りの人やものを愛する人になろう

【宗教教育の基本方針】

「私たち南山大学附属小学校の職員は、小学校の全教育活動を通して、以下のとおり宗教教育をおこないます。

1. 校訓を体現する人を育てます。
2. 知的・精神的側面において、高度に磨かれた人を育てます。
3. 真のリーダーシップを発揮する人を育てます。
4. 自らに与えられた使命を、たしかに自覚できる人を育てます。

また、私たち教職員も、それぞれの実践や研究を通して、絶えざる自己改革に務めます。」

2. 3. 宗教教育の内容

領域1) 日々の学校生活

「南山小」の物語を生きる。心のこもった挨拶、聖家族像(家庭と学校との教育連携のシンボル)への挨拶、聖堂での過ごし方、丁寧な言葉づかい、朝の祈り・昼の祈り(食前食後の祈り)・帰りの祈り、制服の着こなし、等。

領域2) 宗教の授業

神・人・世界に対して、「ひたる」から「問う」「応える」への教育。週一度の「宗教」の授業。祈り、聖歌、聖書、道徳的内容、宗教行事準備、等。担任とのTTを想定。

領域3) 宗教行事

こころを神に向ける。「神と向き合う自己」の発見。復活祭、静修(修養会)、待降節、クリスマス会、受難劇鑑賞、宿泊学習行事でのミサ、等。

領域4) 国際性の涵養

自国の文化を知り、相手の文化を尊重する。神道・仏教・イスラーム・ヒンドゥー教の学習。外国の教会でのミサ体験(オーストラリア)、イスラーム礼拝体験(マレーシア)

領域5) 学校と家庭との教育連携

保護者対象「キリスト教勉強会」

2. 4. 「宗教の役割」を考える

- ・在学する児童の98%はカトリック信者ではない(僧侶の家庭も多い)。その意味でカトリック教会にとってもカトリック学校は日本社会における宗教教育の「最前線」といえる。社会的役割を果たす場。
- ・他方、宗教教育について、[学校経営者サイド — 担当教員サイド — 児童サイド — 保護者サイド]それぞれが、「何をどれだけ」必要としているのか。宗派教育、宗教知識教育、宗教情操教育、宗教文化教育など。見極める必要がある。
- ・前項に挙げた教育内容はカリキュラムであり、教育プログラムである。それはそれで、磨き上げていく必要がある。「社会における宗教(教育)の役割」の重要な部分を占めるだろう。
- ・しかしながら、子どもが働きかける環境「施設設備」「ひと」「カリキュラム」のうち、もっとも重要なのは「ひと」である。教育に携わる私の一挙手一投足が、子どもの成長にとって善いものとなっているか。絶えざる問い。自己改革。
- ・「ひと」による宗教教育は、神の存在や認識を論じるのではなく、神が人や出来事を通して働く、その働きを「運ぶ」教育。子どもが、自分が神から愛された「かけがえのない私」であること、であるから同様に相手も、「かけがえのないあなた」とであると、(教育者とのかわりのなかで)知ることが重要。
- ・(事例紹介)
- ・「信仰・希望・愛」(「信じるに値する」「希望するに値する」「愛するに値する」)の淵源が神であり、人間の尊厳の淵源が神である、というラディカルな信仰に基づく。これは教育技術ではない。賭けである。

(以上)